

ノルマンディー公 Guillaume のイング ランド征服の軌跡を追う

—ノルマンディーとイギリス南東部を訪ねて—

野原 康弘

2008年、8月。夏にしては肌寒い「ロンドン・ヒースロー空港」から「パリ・シャルルドゴール空港」へ。1時間弱の飛行にもかかわらず、天気は好転。イギリスではめったに見られない青く澄んだ空。その紺碧の空を突き刺すように聳えるエッフェル塔。太陽の鋭い光を浴びて輝く凱旋門。ホテルのすぐ傍をゆったりと流れる青きセヌ川。翌日のノルマンディーへの快適な旅を約束してくれそうな気持ちのいい午後だった。

翌朝、窓から空を見上げて、まだ LONDON（これ以降、都市名は大文字で表記）にいたと思ったのは私の錯覚だった。PARIS の様子は昨日と劇的に変化していた。今にも雨が落ちてきそうな曇り空。昨晚、青い光を放ち¹⁾、幻想的だったエッフェル塔もこんな曇天ではなんとも様にならない。黒く流れるセヌ川、夏の PARIS には似合わない。昨日は堂々と立っていた凱旋門も心なしか迫力が無い。

本日、丸一日チャーターした車はそんな PARIS を出発して、ノルマンディーへ。この日の主な訪問先は CAEN（カン）と BAYEUX（バイユー）と FALAISE（ファーレイズ）の三箇所。その中でも特に BAYEUX。

この町 BAYEUX にはフランスの国宝がある。それは 'Tapisserie de Bayeux'（'The Bayeux Tapestry'）²⁾ と呼ばれるもので、この町の美術館が所蔵している。

今回のこのノルマンディーへの旅は、この国宝 'Tapisserie de Bayeux'（以

後、「バイユー・タペストリー」か、単に「タペストリー」と表記する)を入念に鑑賞すること。そして、その「バイユー・タペストリー」に関する資料をできる限り収集することであった。

ポツリポツリと降り出した雨がフロントガラスを軽くたたく。その雨が横殴りの強い雨に変わったとき、車は近代的な大都市の猥雑さを離れ、のどかなノルマンディー地方の緑の森の中に吸い込まれていった。

10～11世紀のノルマンディー地方

(1)ヴァイキングの航海と遠征

9世紀から10世紀に、キリスト教西ヨーロッパを脅かしたあらゆる危機の中で最も深刻だったのはヴァイキング³⁾によるものだった(D. Nicolle, p.24)。確かに、西はイングランドやアイルランドを侵略し、その地へ定住。彼らの執拗な襲撃行為は、ヨーロッパの南へも及んだ。ジブラルタル海峡を通り、スペインやイタリアへも侵入。しかし、彼らの進出は西ヨーロッパだけに止まらなかった。Almgren (p.91)によれば、ヴァイキングたちは東ヨーロッパへも遠征していく。バルト海を東へ進み、現在のロシア、ウクライナ方面まで進出。西はイングランドやアイルランドから、さらに西へ進み、アイスランドはもちろん、グリーンランドから北アメリカまで航海して行ったという。

(2)ノルマン人

このヴァイキングの一部は Rollo という首長に率いられて西フランク王国に侵入。ここではノルマン人と呼ばれた。セヌ川をさかのぼり、何度も PARIS に攻め込んで、西フランク王国を脅かした。今にも PARIS を陥落させてしまいそうな彼らの勢い。堪りかねた Charles III (シャルル 3 世) はフランス北西部の地方を彼らに譲渡する約束で和睦⁴⁾。この地が「ノルマンディー」である。

(3)ノルマンディー公国の成立

首長 Rollo に「公爵」の位が授与され、Rollo は初代ノルマンディー公爵 Duc de Normandie (Duke of Normandy) になった。時は911年。ここに、「イングランドのデーンロー (Danelaw)」に続いて、Trevelyan (p.99) が「第2のデーンロー」と呼ぶ「ノルマンディー公国」が誕生したのである。

その当時のノルマンディーに思いを馳せていると、車はノルマンディーの首府である ROUEN(ルーアン)の近くまで来ていた。その郊外を通り抜け、最初の目的地 CAEN に向かう。CAEN はもともと小さな町であった。ここに堅固な城を築き、二つの修道院を寄贈し、この町を ROUEN と同じぐらい戦略上重要な拠点に作り上げたのが Guillaume (ギョウム) である。その Guillaume は Rollo の子孫であり、7代目ノルマンディー公爵。本稿での主人公の一人である。

3人の重要人物

本稿にはいろいろな歴史上の人物がつつぎと登場する。その中でもこの「バイユー・タペストリー」に精細に描写されている3人の王に焦点を当ててみることにする。

最初は、先ほど登場した ① Guillaume。彼は1066年にイングランドに上陸し、イングランドを征服し、イングランド王 William I として即位した人物で、別名 William the Conqueror (ウイリアム征服王)。

二番目は ② Edward。1042年に、本人の意志とは関係なくイングランド王にされてしまった Edward 王のこと。彼は信仰に非常に篤かったので、Edward the Confessor (エドワード懺悔王) とも呼ばれた。

そして三番目は ③ Harold。Edward 王の死後、1066年に Harold II としてイングランド王に就いたサクソン貴族。そのために、人々からは The Last Saxon King (最後のサクソン王) と呼ばれた。

これら3人が英仏海峡を挟んだイングランドとノルマンディーで、歴史の波に大きく翻弄されていく。1064年から1066年までの2年間、この3人の宿命的な係わり合いを刺繍された絵と短いラテン語の説明で記録しているのが、既に述べた「バイユー・タペストリー」である。

それでは CAEN に到着する前に、ここノルマンディー出身の Guillaume から始めてみたいと思う。

① Guillaume

Guillaume は、6代目ノルマンディー公爵である Duc Robert (ロベール) de Normandie の息子として、1027年に CAEN の郊外にある FALAISE という小さな町で生まれた。この Robert は、実兄である5代目ノルマンディー公爵 Richard (リシャール) を暗殺し、自身が6代目ノルマンディー公爵に即位したといわれている(『アングロ・サクソン年代記』の1024年の章によれば、Richard の統治は1年だけである)。そのために「悪魔のロベール」という異名を持つ。それほど傲慢で、猛々しく、破廉恥で、時には冷酷でさえあったような人物である。

さすがの Robert も自分の行為を省みて、慚愧に堪えられなくなり、巡礼の旅に出かけてしまう。ところが1035年、その Robert が巡礼先で亡くなった。そのため、Guillaume は若干8歳で7代目のノルマンディー公爵の地位を相続した。

公爵の地位を相続した Guillaume であったが、彼は嫡男ではなかった⁵⁾。彼の母親 Harlotte (または Aletta と表記されている) は FALAISE の平民の出身で、Robert の正妻ではなかったが Guillaume を出産した。このために、彼は「私生児ギヨーム ('Guillaume the Bastard')」というありがたい名前で呼ばれていた。母親は後に Herluin of Conteville と正式に結婚し、Robert と Odon という二人の子供 (Guillaume にとっては異父弟)

を出産した。この二人の弟がイングランド侵攻の際に Guillaume の右腕として彼を大いに助け、戦場でも大活躍をすることになる。

Guillaume に関する人々

Rollo : 初代ノルマンディー公爵

Richard : 5代目ノルマンディー公爵, Robert の兄, Guillaume の叔父

Robert : 6代目ノルマンディー公爵, Guillaume の父

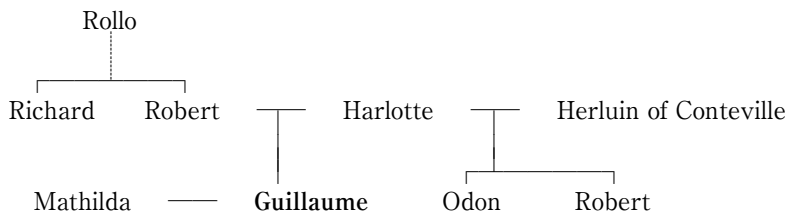
Harlotte / Aletta : Robert の内縁の妻, Guillaume の母

Mathilda / Matilda : Guillaume の妻,

Robert Count of Mortain : Guillaume の異父弟

Odon / Odo, Bishop of Bayuex : Guillaume の異父弟

Guillaume の系図



ここで、CAEN に到着。雨は傘をさすほどでもない細かい雨に変わっていた。早速、Guillaume が築いた CAEN 城へ。小高い丘の上に立つこの城跡は要塞そのもの。敵の襲撃にも十分耐えられるように造られていたと思われる。現在、内部はほとんど残っていないが、‘ramparts’ とよばれる外側の城郭は頑丈な姿を今も維持している。その城郭に登ってみると CAEN の町が一望できる。城の南側の城郭からは、すぐ目の前に堂々と聳え立つサン・ピエール教会が。西側に動いていくとさらに二つの教会が。東側に、もう二つの教会が。なんと教会の多い町だろう。

この CAEN という町には、城を挟んで2つの大きな修道院がある。町の

東側にあるのが Abbaye-aux-Hommes (Men's Abbey) という「男子修道院」。この中にも教会がある。そして、西側にあるのが Abbaye-aux-Dames (Ladies' Abbey) という「女子修道院」である。これにはちょっとした理由がある。

Guillaume が結婚相手に選んだのは、Mathilda という女性であった。彼女はフランダース地方を治める Court Beaudoin VI の娘であった。ところが、Guillaume も Mathilda もともに Rollo の血を引く遠い親戚にあたるため、教会は二人の結婚に猛反対した。悪いことに、ローマ法王レオ9世までもこの結婚に真っ向から反対することになってしまった (Ashley, p.64)。

周りを敵に囲まれた「ノルマンディー公国」にとって、この結婚はフランダースと親密な関係を築いておくという意味で不可欠なものだった。そこで Guillaume は男子修道院を、一方 Mathilda は女子修道院をそれぞれ献堂することを約束して、教会側から結婚の許しを得たのである。そのために二人の墓は別々に安置されている。Guillaume は男子修道院の中にある Saint-Etienne Abby Church に埋葬されている (『アングロ・サクソン年代記』の1086年の章)。一方、Mathilda は女子修道院の Trinity Abbey Church の方で永眠している。

その「男子修道院」の前に駐車してもらい、内部見学を申し出たが、この日は日曜日で、朝からミサがおこなわれていたため残念ながら内部の見学は断念しなければならなかった。

沈む気持ちを取り直して、「タペストリー」の町 BAYEUX に向けて出発。CAEN から車で30分ほどの距離。到着前に、「タペストリー」に関係する当時のイングランドの情勢を簡潔に説明しておかねばならない。

10～11世紀のイングランド

(1)ウエセックス王国の危機

899年、有能なサクソン王であった Alfred 大王が死去した。それまで

Alfred 大王とデーン人の指導者 Guthrum（グトルム）の間で交わされた休戦協定（885年）に基づき「デーンロー」地域に定住していたデーン人たちがテムズ川を越えて「ウェセックス王国」への侵略を再び開始した。Alfred 大王の後継者であるサクソン王たちは自分たちの国土を防衛するのに必死になっていた。

このような状況下のイングランドにおいて、1013年、デンマーク王 Sweyne とその息子 Canute が LONDON に侵略してきた。当時のサクソン王 Ethelred II は、2 番目の妻 Emma と二人の子供をつれて、ノルマンディーに逃走した。このため、Sweyne が王として、イングランドを支配することになった。ところが肝心の Sweyne 王が翌年、急死したため、Ethelred II はイングランドに戻って、王に復辟し、サクソン王国が復活した。

しかし1015年になると、亡き Sweyne 王の息子 Canute がデーン軍の大船隊を率いて再び LONDON に攻め込んできた。頼りの Ethelred II は復辟はしたものの、病に倒れ、その間、指揮を執っていたのは、Ethelred II の先妻との息子 Edmund だった。Ethelred II は1016年に亡くなってしまった。後を継いで即位した Edmund は、Canute との戦いに全力を注いでいた（『アングロ・サクソン年代記』1015年の章）。

ところが、その Edmund 王が暗殺され、その息子 Edward と孫 Edgar はハンガリーへ亡命したため、Canute がイングランド王として即位した。これによりイングランドの「デーン王朝」が正式に成立した。それが1016年のことである。

一方、Ethelred II の 2 番目の妻 Emma との間に生まれた二人の息子、Edward 王子と Alfred 王子は、再びノルマンディーに逃れて、ノルマンディーの僧院で成長することになる。ここでの生活は Edward に特に大きな影響を与えることになる。

(2) 「デーン王朝」の成立と滅亡

Canute 王（23歳）は、Ethelred II の后であった未亡人 Emma（30歳）

と結婚し、二人は息子 Harthacanute を授かった。Canute 王はその後、先妻との息子である Harold をノルウェー王に、さらに Emma との息子 Harthacanute をデンマーク王に任命し、彼自身はノルウェー、デンマーク、イングランドの三国を支配する大王になった。ところが、1035年、Canute 大王は41歳で急逝してしまう。

その後を Canute 大王の長男 Harold が Harold I として即位したものの、義母 Emma とうまくいかず、彼女を王室から追放した。しかし、その Harold I も5年後の1040年に若くして亡くなってしまった。

Emma は Harold I の急逝後すぐに王室に復帰し、最愛の息子 Harthacanute をデンマークから帰国させ、王位を継承させた。ところが、その Harthacanute 王も1042年に怪死を遂げてしまう。Harthacanute の死には確かに謎めいたところがあった。

『アングロ・サクソン年代記』の1042年の章によれば、彼は立って酒を飲んでいたら、突然ひどい痙攣をおこして、床に倒れたとある。サクソン人に毒殺された可能性は高い。

このようにして、デーン王朝はあっさり幕を閉じてしまった。Canute 大王から Harthacanute 王まで三代にわたったがイングランドの統治期間は、30年にも満たなかった。

「デーン王朝」と関係のある人々

Sweyne / Swein : デンマーク王、イングランドに侵攻

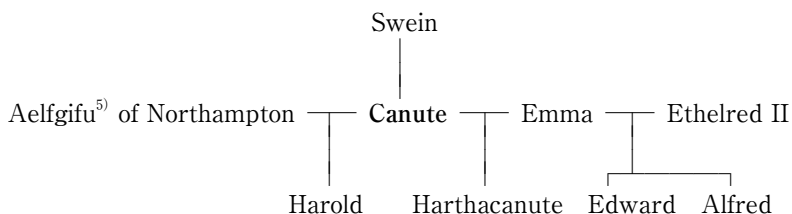
Canute / Cnut : Sweyne の息子、「デーン王朝」の初代王

Harold : Canute の長男、Harold I として2代目の王

Emma : Canute の2番目の妻、Edward 王の母

Harthacanute / Hardecanute : Canute と Emma の息子、3代目の王
Edward 王は異父兄にあたる。

Canute 王の系図



(3)王位継承問題

以上が「デーン王朝」時代のイングランドの状況である。10～11世紀にかけてのノルマンディーとイングランドの両国はイングランド王 Ethelred II とノルマンディー公国の Emma の結婚によって、非常に親密な関係を保持していた。すなわち両国の間に不可侵条約が暗黙のうちに形成されていたわけである。

デーン王朝、Canute の直系の子孫がないことによって、デーン王朝は完全に滅亡し、イングランドに王位継承問題が生じた。イングランド人が望む王は、デーン王朝が成立したときに、ノルマンディーに逃れたサクソン王 Ethelred II の息子 Edward であった。

(4) Alfred の帰国

Ethelred II には二人の息子がいた。一人は Edward, そしてその弟 Alfred である。二人ともノルマンディーに逃れて生き延びていた。

ところが Alfred は、デーン王朝 Harold I の治世下で、密かにイングランドの WINCHESTER に戻った。そこは Godwin 伯の領土であったが、Harold I から追放された実母 Emma が、こっそりと身を寄せている場所だった。母の保護と支援を期待して帰国した Alfred であったが、母は Alfred に対して意外にも冷たく、また Godwin 伯はその Alfred を逮捕し、鎖に繋いだまま監禁した。その後も残酷な処遇を受けていた Alfred は最後には目をくり抜かれて死亡してしまった (Brooke, p.83)。

Emma の息子 Alfred を殺害したことにより、Godwin 伯は Harold I の信頼を回復した。Canute 王の治世下と同じように再び王室との関係を強め、サクソン貴族の中でも確固たる地位を確立し、その勢力をさらに拡大していった。

Alfred の死亡により、イングランドの王位継承の最有力候補は、逃亡先のノルマンディーの僧院に残された Edward であった。

ここで Edward について詳しく述べなければならない。

② Edward

前述の通り、Edward は、サクソン王 Ethelred II と母親 Emma の息子として1005年に誕生している。母親 Emma は3代目ノルマンディー公爵 Richard の娘である。したがってこの Edward と最初に紹介したノルマンディーの Guillaume とは遠い親戚関係にあることになる。すなわち、Guillaume の祖父 Richard II (4代目ノルマンディー公) は Emma の実兄である。

前にも述べたように、Edward は父 Ethelred II の死後、母親 Emma が Canute と再婚したために、母親の故郷ノルマンディーに弟 Alfred と共に逃れた (Brooke, p.82)。

Trowles (pp.16-17) によると、幼年期、青年期にあたる最初の25年間をノルマンディーの僧院で快適な生活を送っていた Edward は、デーン王朝最後の王、Harthacanute (Edward の異父弟にあたる⁶⁾) の王室に招かれていた。そして Harthacanute 王が突然なくなったため、イングランド王として即位しなければならなくなった。

そして、翌年の1043年の4月3日のイースターの日 WINCHESTER で Edward の戴冠式が行われ、King Edward というサクソン人とノルマン人の血を引く国王がここに誕生したわけである (Brewer, pp.13-14)。

最初、イングランドの人々は、サクソン系の王の復帰を大いに歓迎した。

しかし Edward は英語よりフランス語に長けており、そのせいもあって重要な官職にノルマン人たちを登用し、サクソン貴族たちの失望を買った。

また、Edward は敬虔なキリスト教徒で、政治よりも信仰に篤いこともあって、彼の即位を歓迎した人々を大いに落胆させた。結局 Edward は、人々が望む王としての政治的才能はまったく持ちあわせていなかった。しかし、それは Edward のせいではない。彼はノルマンディーの僧院で、信仰の生活を送ることの方がずっと適していた人物だった。それこそ、Edward が強く望んでいた人生ではなかっただろう。むしろ、Godwin 伯に殺された Alfred の方が王としてはより適任だったのかも知れない。

しかし、Godwin 伯にとって、イングランド王への野望を持った Alfred よりも、政治にまったく関心のない Edward の方が好都合だった。Godwin 伯は自分の娘 Edith を Edward 王に嫁がせた。そのため Godwin 伯は摂政として手腕をますます発揮できる立場になった。それは国民の望むところであり、生粋のサクソン人である Godwin 伯に対する国民の期待と思慕の思いは非常に強いものがあつた。

このように人気を博していた Godwin 伯は Edward 王にとって目障りな存在であったことも確かである。ケント地方の港町 SANDWICH で起きた事件をきっかけに Edward 王は、Godwin 伯とその息子 Harold（デーン王朝の Harold、すなわち Harold I とは別人物である）を国外追放にしたことがある。しかし、彼らは外国で、Edward 王がもはや逆らうことができないほどの力を蓄えてイングランドに戻ってきた。Godwin 伯はしばらくして亡くなったが、その全権を息子 Harold が受け継ぐことになった。

Edward に関係する人々

Ethelred II : Edward の父

Emma : Edward の母、ノルマンディー出身、Guillaume とは親戚

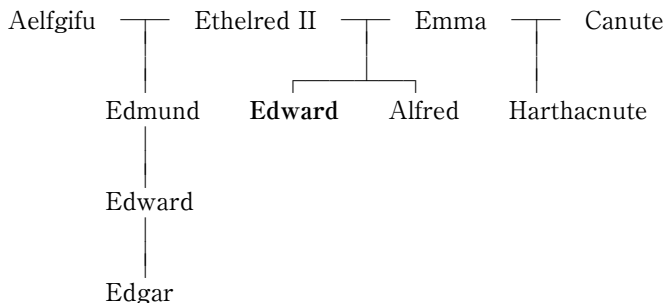
Alfred : Edward の弟

Canute : 「デーン王朝」の初代王、Emma と再婚、Edward の義理の父

Harthacanute : Canute と Emma の息子, Edward の義理の弟, 「デーン王朝」 3 代目の王

Edith : Godwin 伯の娘, Edward 王妃

Edward の系図



30分もたたないうちに、車は BAYEUX の町に入って行った。第二次世界大戦中、ノルマンディー上陸作戦時にドイツ軍の爆撃を受けてほとんど破壊されてしまったために、街並みは新しい。修道院や教会が爆撃を受けずにすんだのは非常に幸運なことであった。町には上陸作戦当時の資料などを展示した「ノルマンディー戦争博物館」もある。

早速、注目の「バイユー・タペストリー」が展示されてある美術館へ向かった。途中、戦火を逃れた「ノートルダム大聖堂」があったが、ここは Guillaume の異父弟 Odon が司祭を務めていたところである。そこを通り過ぎて美術館に到着。

このような「タペストリー」に興味をもつ人もそんなにいないだろうし、館内は閑散としていてゆっくりと見学できるだろうという期待は入り口でものの見事に裏切られた。入場券を買うところから並び、そこから「タペストリー」までは長い列。係員によれば、日本からの見学者はほとんどいないが、イギリスからの見学者が多いとのことだった。

それでも70メートルの距離がある「タペストリー」を30分かけてゆっくり

と見学できた。後ろの見学者の進みに邪魔にならない程度に、出来るだけゆっくり歩き、詳細に観察することができたと思う。本来は一続きの「タペストリー」であるが、描かれている場面の内容を解説するために、便宜上、1から58の番号がうたれてあり、58の場面に分けられてあった。分けられたそれぞれの場面を一枚一枚すべて写真に収めることが出来ただけでも BAYEUX に来た甲斐が十分にあったと思う。

「タペストリー」は、王となった Edward がある人物に使命を与えているところから始まっている。それ以前のことはまったく描かれていない。その使命を与えられている人物こそ、Godwin 伯の息子 Harold である。本稿において、三番目の重要人物である。

ここで Harold について少し紙面を割かなくてはならないだろう。すでに述べられた人物などもあり、重複する箇所もあるが、Harold という人物を理解する上には欠かせないのでお許し願いたい。

③ Harold

Harold は Earl of Wessex (ウエセックス伯爵) Godwin の次男として 1038年に誕生。長男 Swein よりも、父 Godwin のお気に入りの息子であった。

サクソン人 Godwin は、デーン人女性の Gytha と結婚していたため、Canute 王の信頼を受けやすかった。デーン王朝下で、その Canute 王に大いに登用され⁸⁾、他のイングランド貴族たちを排除し、一代で大いに権力を付け、勢力を拡大し、他から恐れられる貴族としての地位を確立していった。父の絶大なる援助の下、Harold は Earl of East Anglia (イースト・アングリア伯爵) に任命され、彼自身も伯爵としての力をつけていった。また Harold の弟 Tosti (あるいは Tostig とも) もノーサンブリア伯爵に任命された。当時、Godwin 伯の力がどれほどすごいものであったかを見せ付ける事例である。

しかし、Trevelyan (p.108) によれば、Godwin 伯のことは、彼について

それ以上の知識があまりにも乏しいために、彼の性格や経歴を的確に評価することができないとしている。Trevelyan はさらに続けて、Godwin 伯が1053年に亡くなったとき、彼の有能な息子 Harold に残したものは、「王の統治の主要な指導権、ウェセックス伯領、テムズ川以南のイングランドの人々が彼に寄せる思慕の情、および多数の州にわたって散在する広大な所領」であるとしている。

このために Godwin 伯の死後も Edward 王は Harold を無視することはできなかったのである。Harold は父の死後、ウェセックスの伯領をそっくりそのまま受け継いだ。そして、それまで自分が所有していたイースト・アングリアの伯領を弟の Gyrth に譲り渡すことにした。

しかし、ノーサンブリアを治めていた Tosti 伯は最初の10年間ほどはそれほど問題はなかった (Walker, p.118)。しかし、住民たちの強い不平、不満が原因で、ノーサンブリア伯爵の地位を剥奪され、追放されてしまった。このとき、Harold は実弟 Tosti を助けることはしなかった。このことが Tosti の恨みを買ってしまい、Tosti の裏切りという形で、兄 Harold に思いもよらぬ大きな打撃を与えることになろうとは、そのときは誰にも想像できなかった。

Harold は、新にノーサンブリア伯爵に任命された Morcar や、マーシア伯爵 Edwin の兄弟とうまくやっていくことを選んだのである。表面的にはともかく、彼らは必ずしも Harold に好意的ではなかった。このことは、「ヘースティングズの戦い」での彼らの期待できない援助にはっきりと現れている。

Harold II に関係する人々 (Walker, p.viii の系図による)

Godwin / Godwine : Earl of Wessex, Harold の父

Gytha : Harold の母,

Edith : Harold の妹, Edward 王の妃

Tosti / Tostig : Harold の弟, ノーサンブリア伯爵, 後に伯位を剥奪される。

ノルマンディー公 Guillaume のイングランド征服の軌跡を追う

Gyrth : Harold の弟, イースト・アングリア伯爵

Leofwine : Harold の弟, イースト・ミッドランド伯爵

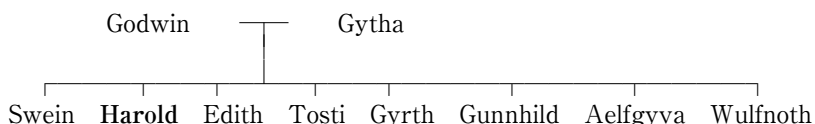
Edith 'Swan-neck' : Harold の妃

Morcar : ノーサンブリア伯爵

Edwin : マーシア伯爵

Harald : ノルウェーの王, Tosti の手引きでイングランドに侵攻

Harold の系図



ノルマンディー, 残りの旅

(1) Guillaume の故郷

「タペストリー」を見学した後, 昼食をとり, 本日最後の訪問地, Guillaume の生まれ故郷 FALAISE に向かう。ここは Guillaume の父 Robert の住居があり, 町に近づくと小高い丘の上に城が見えてきた。

城への坂を登る手前の広場に, 馬に跨った Guillaume の勇壮な姿の銅像が目に入ってきた。この銅像の姿は, 馬が前足を空中に高く上げ, 後ろ足だけで立っており, Guillaume 自身も旗竿を持った右手を天に向けて大きく突き上げている。偉大な指導者の銅像や肖像画に使われる例の構図である。Guillaume の銅像は Rollo をはじめとする 6 人の歴代公爵の銅像に囲まれていて, 公爵たちにしっかりと守られているように見えた。

城への坂を登り始め, 城を近くで見ると, あちこちかなり傷んでいることが分かる。城内ではクレーンを使った大掛かりな修復作業がなされていた。それでも城の外も中も自由に見学させてくれた。内部は非常に近代的な仕掛けで, 映像をふんだんに使った説明は印象的だった。以外に観光客が多いの

には驚いたが、イングランド征服王の生誕地ともなれば当然かも知れない。
車は8時をすぎてもまだ明るい PARIS に戻ってきた。

(2) ROUEN への旅

翌日は、昨日と打って変わってさすが PARIS という感じの晴天。エッフェル塔は晴天に良く似合う。サンラザール駅から9時15分発の電車でノルマンディーの首府である ROUEN を目指す。昨日はこのすぐ近くを車で通っただけだった。1時間20分ほどで到着。ROUEN はセーヌ川沿いの町で、人口11万人。町を散策する限り CAEN と同じぐらいの大きさだと思われる。この町の「ノートルダム大聖堂」には初代ノルマンディー公爵 Rollo の墓がある。

今回の紀行とは直接関係はないが、百年戦争で敗戦色の濃かったフランスを奇跡的に勝利に導いた「ジャンヌ・ダルク」。それにもかかわらず、彼女がイギリス軍に捕らえられ、身代金を要求されたとき、フランスは無慈悲にも彼女を見捨てた。わずか19歳のジャンヌは、この地 ROUEN で火刑に処せられてしまう。町の中心地にその処刑場があり、その跡には「ジャンヌ・ダルク教会」が建てられている。悲壮な気持ちを抱いたまま、ノートルダム大聖堂へ向かった。

(3) 港町 LE HAVRE

しかし、大聖堂ではミサが行われていて、午後2時まで聖堂内に入れないとのことだった。そこでその間に、港町 LE HAVRE に列車で向かうことにした。この LE HAVRE の海岸からまっすぐ北上すればイングランド南部。実際、ここはイングランドの各地へ就航するフェリーの要港でもある。Guillaume はこの LE HAVRE の湾の対岸の DIVES-SUR-MER に軍船を終結させ、大船団を組んで、そこからイングランドに向けて出港していった。9月12日のことだった。しかし途中、嵐にあつて、北フランスの SAINT VALERY-SUR-SOMME に押し戻され、そこで順風を待つためにしばらく

足止めされてしまった。

しかし、もし Guillaume がそのまま順調にイングランドへ上陸していたら、待ち構えていた Harold 軍に撃砕されていたに違いない。後で考えれば、嵐のためにイングランドへの上陸が延期されたことは、Guillaume にとって本当に幸運だったことが分かる。

そう思いながら、LE HAVRE の岸からイングランドの方を見てもまったく何も見えなかった。ここからイギリスの南岸まで100キロは離れているので見えないのが当然であるけれども。

(4) 英仏海峡での海難事故

この海峡は比較的狭いために、潮の流れが速く、昔から海難事故が後を絶たなかった。特に1120年には、Henry I の正式で、しかも唯一の跡継ぎ William 王子を乗せた 'White Ship' 号がこの海峡で沈没した。このために、Henry I の死後、王位継承を巡って醜い争いが長年続くことになった (Morgan, p.119)。

この王位継承を巡る Stephen 王 (Henry I の甥) と Matilda (Henry I の娘) の争いを背景に、大聖堂 (Peterborough Abbey をモデルにしている) の建立を絡ませて描いたのが、Ken Follett (ケン・フォレット) の名作 *The Pillars of the Earth* (『大聖堂』) である。「ソールズベリー大聖堂」も「カンタベリー大聖堂」も「ウエルズ大聖堂」も見事である。もちろん、その他にも「ダラム大聖堂」, 「グラストンベリーの廃墟と化した大聖堂跡」も感動を呼び起こす。しかし、この「ピーターバラ大聖堂」は何度訪れても新たな素晴らしさを感じさせてくれる。

話を元に戻そう。港町 LE HAVRE で、ノルマンディー名物「ムール貝の料理」を堪能した後、再び ROUEN に戻り、ノートルダム大聖堂に向かう。PARIS のノートルダム大聖堂より堂々とした構えである。普通のカメラでは正面の全景を撮るのは不可能なほどである。印象派、モネを魅了したこの

大聖堂は、後に彼の作品、「ルーアンの大聖堂」として生み出される。

内部は天井が高く、広々とした感じがする。入り口から右手奥に Rollo の墓がある。スカンディナヴィア方面から一族を率いて、西フランク王国に侵入し、「ノルマンディー公国」を建設した初代ノルマンディー公爵。彼の血が二人のイングランド王、Edward 王と William I に引き継がれていることを考えると不思議な気がする。

翌日、もう一日フランスで過ごし、素晴らしい天気のパリスに名残を惜しみながら、星の輝きさえも見えない曇り空のイングランドに帰ってきた。

翌朝、レンタカーを借りて6日間かけてイングランド南部を回る。このあたりはイギリス滞在のたびに何度となく訪れたところが多く、私にとってはかなりなじみが深い。今回は「バイユー・タペストリー」に登場する箇所を重点的に訪問することにした。

ここからは、この「タペストリー」の順番で話を進めていく。

「バイユー・タペストリー」の始まり

(1) Edward 王の決断

タペストリーは Edward 王（人物の上部に EDWARD REX と縫い込まれている）が玉座に座り、Harold に使命を与えているところから始まっている。時は1064年。年老いてきた Edward 王（60歳になろうとしていた）は後継ぎのいない自分の後継者に Guillaume を選んだ。そのことをノルマンディーに出向いて、Guillaume に伝えるのが Harold の使命であった。しかし、Edward 王亡き後、その王位を虎視眈々と狙っていた Harold にとって、「ノルマンディーの Guillaume を次期イングランド王として認める」という Edward 王の決断は非常に衝撃的であり、それを Guillaume に伝えに行くというこの使命はまさに屈辱的であった。

ただし、このような事実があったかどうか分からない。この「タペストリー」はあくまで、ノルマンディー側から描かれたもので、Guillaume のイングランド征服を正当化するのに大きな役割を果たしている。したがって、イングランド側から書かれた『アングロ・サクソン年代記』はまったくこの件に触れていないのである (Walker, pp.105-116)。

(2) ノルマンディーへの使命

Harold は仕方なく、自分の家臣たちを引き連れて、南に下り、BOSHAM に立ち寄り。「タペストリー」にはラテン語で以下のように書かれてある。

UBI HAROLD DUX ANGLORUM ET SUI MILITES EQUITANT AD BOSHAM
(Where Harold, Earl of the English, and his army ride to Bosham)

BOSHAM は CHICHESTER と PORTSMOUTH の間にあり、CHICHESTER から A259号線を西に少し行ったところにある小さな港町である。Harold の一行はここにある教会に参詣し、食事をした後、乗船し、ノルマンディーに向けて出港する。これらの場面も詳しく描かれている。

Wilson (p.174) は Harold が他の町ではなく、この BOSHAM に立ち寄り、ここから出港したのは、ここに Harold あるいは彼の父 Godwin (Edward の人物紹介を参照) の 'manor house' があったためではないかと考えている。確かに、『アングロ・サクソン年代記』の1048年の章によれば、Edward 王から国外追放を言い渡された Godwin 伯はこの地 BOSHAM にやって来て、そこからイングランドを離れたと、ある。

Harold の一行は、流れの速い潮に押し上げられて、ノルマンディーよりずっと北の海岸に漂着してしまった。しかしそこは Guillaume ではなく Guy 侯爵の領土だったため、すぐに捕らえられ、Guy 公爵の館へ連行されてしまった。Guy 侯爵は Harold に身代金を要求した。

一方、Harold 逮捕の報告が Guillaume の元へ届いた。Guillaume は Guy 侯爵の元へ急いで使者を送った。使者は Harold を直ちに自分の元へ連れて来るようにという Guillaume の命令を伝えた。Guy 侯爵は Guillaume の申し出に従い Harold を Guillaume のところへ送り届け、Harold は無事解放された。しかしこの事件により Harold は Guillaume に大きな借りができたことになった。

このあたりの「タペストリー」の配列の順序に若干の問題があり、どうみても前後しているところもあるが、それでもこの事件の概要は十分掴むことができる。

(3) ブルターニュへの遠征

「タペストリー」の次の場面では、上部に「モン・サン・ミッシェル」が登場してくる。「モン・サン・ミッシェル」は、ブルターニュ半島のつけ根にあり、ノルマンディーとブルターニュの境界にもなっている。「モン・サン・ミッシェル」が描かれていることはブルターニュ方面でのこれからの出来事を連想させている。

実際 Guillaume はブルターニュの Conan 伯の反乱鎮圧に Harold を同行する。Guillaume は直ちに Conan 伯の Dol 城の攻撃を開始した。Conan 伯は逃亡するが、Guillaume は彼を追討していく。途中でブルターニュの首府 REDNES も制圧。最後に Dol 城から逃亡した Conan 伯が避難していた Dinantes 城を包囲、城に放火。堪りかねた Conan 伯は、Guillaume に降参するという一連の事件がこの「タペストリー」に詳しく描かれている。この反乱鎮圧により Guillaume は Harold にその力をまざまざと見せつけている。

Guillaume の軍は Harold を伴ってノルマンディーに帰還する。

(4) Harold の偽りの誓い

その後、Harold は BAYEUX からイングランドへの帰国の途につくわけ

だが、その前に重要な一場面が「タペストリー」に描かれている。

Guillaume が玉座に座り、傍に立っている Harold が厳かに「宣誓」をしている場面である。*Secrets of the Bayeux Tapestry* (p.12) によれば、Harold はこのとき、二つの聖遺物に触れながら宣誓をおこなっている、とあり、*Tapissierie de Bayeux* (pp.14-15) によれば、その宣誓の内容は、「Guillaume が将来、イングランド王として即位することを認める」というものであった。確かに、それは Edward 王の意思であり、それを Guillaume に伝えるのが、Harold の今回の使命であったはずである。

この後、Harold の一行は、ノルマンディーからイングランドに戻る。すぐに LONDON にいる Edward 王を訪問し、ノルマンディーの報告をしている Harold の姿が描かれている。

Edward 王の永眠と王位継承問題

「バイユー・タペストリー」は病床の Edward 王の臨終の場面を描いている。心配そうに(?) 立ち会う Edith 王妃と様子を見守っている Harold 伯。

そして Edward 王は1066年1月5日に息を引き取った (Trowles, p.16)。遺体は Edward 王が建設に力を注ぎ、竣工したばかり (1065年12月28日) の「ウエストminster 寺院」に埋葬された。残念ながら Edward 王が建立した寺院は現在まったく残っていない。現在の「ウエストminster 寺院」は、Henry III がゴシック建築様式で再建させたものである。寺院の北入口から入って、中央の左手に Edward 王のための SHRINE も新しく特設された (Brewer, p.17)。

(1) Harold の即位

跡継ぎのいない Edward 王が逝去し、翌日には急ぎ葬儀がおこなわれた。ところが、こともあろうに、亡き王の葬儀の日 (1月6日) に、Harold は慌ただしく戴冠式を行わせた (Walker, p.155)。

「タペストリー」には Harold の戴冠式の場面も描かれている。純粹に王位継承権から言えば、王家とまったく血の繋がりが無い Harold が王位に就くことには問題がある。本来なら、Edward 王の異母兄にあたる故 Edmund 王の息子で、「デーン王朝」成立のとき、ハンガリーに逃れた Edward が、血の繋がりから言えば一番正統な跡継ぎだと考えられる。しかし、Edward は1057年にイングランドに連れ戻されたが、不慮の死を遂げてしまった。正式な記録も残されていない (Brewer, p.14)。そうすると、故 Edmund 王の孫 Edgar も候補者の一人に登ってくるが、彼はまだ幼すぎたのか、ここではまったく無視されている。

自分より適任者が何人かいることを十分理解している Harold は Edward 王の葬式と彼の戴冠式を全く同じ日に急ぎ済ませたのである。

Halliday (p.16) は次のように述べている。“When, therefore, Edward died childless at the beginning of 1066, the Witan elected Harold as his successor.”

戴冠式の模様は「タペストリー」に描かれている。中央の Coronation Chair に座る Harold 。その Harold に王剣をささげている二人の人物がいる。おそらく、彼らが Harold の即位を支持する the Witan (賢人会) であろう。その右側には、Stigant 司教 (名前が縫い込まれている) が Harold の即位を祝福し、人々がその様子を満足げに眺めている。

(2) 大彗星出現

ところがそのすぐつぎの場面で、天空に出現した「大彗星」(「ハレー彗星」であろう) が描かれている。当時、大彗星は典型的な凶兆の印 (a bad omen) であった。

その大彗星を見上げ、指差しながら震えあがっている人々。「タペストリー」には、ラテン語で“ISTI MIRANT STELLA” (「彼らは星を眺めている」) とある。

そして、使者 (おそらく占星術師) から大彗星のニュースを知らされ、驚

く Harold 自身（ノルマンディー側から描いたものだから）のすがたも描かれている。『アングロ・サクソン年代記』によれば、それより約70年前の995年にもこのような大彗星が現れたことが書かれてある。

Harold の即位の年、1066年には、最初の大彗星が4月24日に現れ、7日間にも渡り、出現していたことが『アングロ・サクソン年代記』の同年の章に書かれてある。不吉な出来事の前触れとして、Harold 王自身も、そして一般の人々も大いに恐れ慄いていたのである。

(3) 第一の凶兆

そしてその凶事は、こともあろうに実の弟 Tosti からもたらされることになる。Tosti がノーサンブリア伯爵の地位から追放されてしまったとき、Harold は助けてくれるどころかそれをうまく利用した。それ以来、兄 Harold を恨んでいた。彼は、ノルウェー王 (Harald Hardradi) を説得して、Harold の王位継承に異議を唱えさせ、イングランド北部に攻め入ってきた。9月20日のことだった。

この軍勢は、YORK の2マイル南で Edwin 伯と Morcar 伯の連合軍を破った (the Battle of FULFORD)。そしてYORK の付近を占領し、意気揚々としていた。この事件は Edwin 伯と Morcar 伯からイングランド王である Harold 王に報告された。彼はすぐに自分の軍を率いて、LONDON から YORK まで進軍しなければならなくなった。

YORK 付近に到着した Harold 王は、弟 Tosti とノルウェー王 Harald の連合軍を完全に打ち破り、この侵攻の張本人の二人を戦死させ、この戦いで大勝利を収め、Morcar 伯や Edwin 伯に大きな貸しを作ることが出来た。これが9月25日の 'the Battle of STAMFORD BRIDGE' (「スタンフォード橋の戦い」) である。

自らの手で「第一の凶兆」を叩き潰したばかりの Harold 王の元に、不幸にも「第二の凶兆」の知らせが届いた。

(4) 第二の凶兆

それはノルマンディーの Guillaume 公爵が自らの王位継承を主張して、大船団を率いて、イングランド南部の小さな漁村、PEVENSEY に上陸したというニュースであった。

というのも「タペストリー」に克明に描かれているように、Edward 王の訃報と Harold の戴冠の知らせは、すぐさま Guillaume の元へ伝えられた。Guillaume はさっそく会議を開き、イングランドへの侵攻が決議され、すぐに戦闘のための準備に取り掛かっていた。

木が伐採され、大型の船がづぎづぎに建造され、戦闘用の鎧、剣、槍、弓と矢などの武具が大量に用意され、食料とともに次々と船に積み込まれた。軍馬も安全に乗せられた。そして DIVES-SUR-MER から出港したが、前にも述べたように不運にも嵐のためノルマンディーの海岸に引きかえさなければならなくなった。SAINT-VALERY-SUR-SOMME で再び出港のときを待った。しばらくは、風の向きが悪かった。

実際、Guillaume の軍団は、6週間、逆風のため港に閉じ込められたのである (Travelyan, p.113)。というのも、イギリスの南部に上陸するには、北の風、あるいは北西の風でなければならない。

しかし、我慢の限界にきていたノルマンディー軍団に、吉報が届けられた。ノルウェー王と Tosti の連合船団が YORK に攻め込んできて、そこを占拠したというのだ (9月20日)。彼らを迎え撃つために、Harold 王は YORK に向けて進軍したという知らせだった。Guillaume は「これで南部の海岸線の防備は手薄になっているはずだ。今がチャンス。」と確信した。「待てば海路の日和あり」である。急に風が吹き始めた。それも好都合の北西の風。すぐさま乗船の準備を整えさせて、ノルマンディーを後にして、イングランドに向けて出港した。9月27日の夜のことだった。

イギリス南東部のドライブ

(1) PEVENSEY までの海岸線

以前、アングロ・サクソン族のブリテン島侵略の引き金となった、Hengist と Horsa⁹⁾ の上陸地点の調査で RAMSGATE の付近まで行ったことがある。調査終了後、今回の旅程とはまったく逆方向を海岸線に沿って移動した。

まず RAMSGATE から SANDWICH に行き、そこから海岸線をひたすら走り、PORTSMOUTH まで運転した。そこからさらに北上し、WINCHESTER を通り、OXFORD に帰った。そのときのことを思い起こしてみることにする。

昔は大陸からの寄港地として賑わった港町 SANDWICH。海岸から少し離れた内陸部を走り、そして DEAL。ここはビーチを持つなだらかな海岸線。さらに南下して DOVER へ。DOVER は砂浜のある港も持つが、その周りはほとんど白亜 Cliffs。ここから海岸線を南西に FOLKSTONE, HYTHE などを通り抜け、ROMNEY へ。ROMNEY には海岸線に近い NEW ROMNEY と海岸線からずっと奥に入った OLD ROMNEY がある。両方が離れすぎていることを不思議に思っていた。

小さなアンティーク・ショップが立ち並ぶ小さな観光地、Rye へ。今回、RYE で泊まった Bed & Breakfast (通称 B&B) の主人に教えてもらって謎が解けた。1000年ほど前は、RYE は孤島で、NEW ROMNEY は海だったそうだ。この辺りは遠浅で、大規模な沖積のため地形が変化して潮がここまで満ちてこなくなったのだそうだ。B&B のこの家は崖の上に建っていた。はるか昔はこの崖のすぐ下まで潮が来ていたそうだ。現在の海岸線は、はるか向こうに後退してしまったとのことだった。

Ashley (p.38) の1066年のこの付近の地図を見ても、当時の海岸線はずっと北に位置している。PEVENSEY も今よりもっと大きな湾で、廃墟となっ

ている城のすぐ傍まで海であったことが分かる。RYE はやはり孤島として描かれている。

そして RYE から HASTINGS へ。そこから西へ BEXHILL を通り PEVENSEY へ。この付近は美しい砂浜の海岸線を持つ。再び南下して EASTBOURNE, さらに西へ。イギリスの旅行書には必ずといっていいほど掲載されている「白亜の絶壁 SEVEN SISTERS」を歩く。この付近は絶壁の間に湾もあるが、砂浜ではなくて小石なので歩きにくい。上陸には向かないと思われる。

SEAFORD を経て NEWHAVEN。すぐに BRIGHTON で WORTHING もすぐ。BOGNOR REGIS をすぎるともう CHICHESTER。はるか昔、ローマ人によってつくられた町。今までのA27号線を反れて、少し細い道のA259に入り、西に進み少し南に下ると「バイユー・タペストリー」にも登場する BOSHAM という漁村。そこから途中でA27号線に戻り、しばらく走って再び南下すると PORTSMOUTH。日露戦争の講和条約が締結されたところでもある。そこから WIGHT 島が目の前に迫ってきたのが印象的だった。この付近の町はそれぞれ美しい湾や砂浜を持つが、昔から漁港として栄えたところが多く、海岸の警備も当然厳しかったと思われる。

(2) PEVENSEY という漁村

このように車でイングランド南東部の海岸沿いを走ってみると、波が穏やかで、細かいジャリの混った砂浜の海岸線が長い PEVENSEY は、上陸するには最も適した場所だったのかも知れない。今では海水浴場としてもそれなりの賑わいをみせたり、イギリス製塩工業の中心地でもあるが、当時は小さな、というよりひなびた漁村にすぎなかったので、万が一、Harold 軍の一部が海岸線警備のために残っていたとしても、この PEVENSEY で待ち構えている可能性は極めて低かったと思われる。

Guillaume は上陸中に攻撃されることを一番恐れていたに違いない。どんな海岸でも上陸する方が絶対に不利であることは分かっていたはずだ。特に

今回は乗せてきた軍馬を船から無事に降ろさなければならなかった。「タペストリー」には、沢山の軍馬と兵士を積んだ船が、この PEVENSEY に向かう場面と、PEVENSEY 到着後、軍馬を船から降ろす場面が描かれている。

しかし、幸運なことに Harold I の軍隊のほとんどが今は YORK なのだ。とにかく無事上陸できたことを Guillaume は一番喜んだに違いない。この記念すべき上陸は9月28日のことであった。この夏、ここを訪ねたのは8月26日であった。

ところで、この PEVENSEY にはローマ人がつくった城がある。Guillaume は、そのローマの城壁の内側に ‘base camp’ を作り、周りに濠をめぐらし、土を盛り上げ土手をつくり、 ‘palisade’ と呼ばれる、木の杭を連ねて柵を張り巡らした。このようにしてすぐに簡易の砦が完成し、一晩だけ仮の滞在をすることができた。おそらく、その当時間も城は廃墟に近い状態で、万が一の長期戦を考えると城として作り直すには不向きだったため、Guillaume は PEVENSEY を諦めたのであろう。

「バイユー・タペストリー」に戻ろう。

The Battle of HASTINGS

(1) 戦闘の準備

Guillaume は、すぐに HASTINGS まで移動することにした。「タペストリー」は、まず食料調達、それらが調理される場所、さらに宴の場面など細かく描いている。全てが順調に運んでいることを表現している。

ここで、Guillaume を真ん中に、彼の二人の異父弟、Odon 司教と Robert 侯（「タペストリー」では ROTBERT となっているが）が登場する。作戦会議の場面であろうか三人が熱心に話し合っている。

そしてつぎに Guillaume がその小高い丘の上に戦闘用の本格的な城を建築させる様子が描かれている。

(2) 築城の様子

HASTINGS は城を建設するには最高の場所だった。PEVENSEY と同じように今は海水浴場となっている大きな砂浜があり、船から築城の機材などを降ろすには最適の場所。その海岸からすぐのところ、歩いて登るには不可能な絶壁の丘が聳えている。この丘の上からは遠くまで見渡せるので、海からの進入をいち早く察知することができる。丘の海側の絶壁には、今はケーブルカーが設置されていた。丘の反対側は、歩いて登るにはかなり急な坂である。それでもようやく坂を上りきると、最高の眺望。360度全部見渡せる。それにしても、もしこの場所に城を建設することを上陸前から決めていたとすれば、Guillaume の情報網の確かさは素晴らしいものだと感心せざるを得ない。

HASTINGS で城の建築と戦闘の準備で多忙な Guillaume の元に、YORK での Harold 王の勝利（9月25日）が報告されたに違いない。使者が Guillaume に報告を行っている場面が描かれている。「タベストリー」はこの YORK での戦闘についてはまったく触れていない。

つぎの場面は残酷である。兵士二人が民家を焼き払い、サクソン人の女の子の手を引いて逃げていく。Guillaume の支配に抵抗した家か、食料を提供しなかったのか、見せしめにしても惨たらしい。しかし、焼き打ちが Guillaume の得意とするところで、ブルターニュでの Conan 伯との戦闘でも城に火をつけたし、この後も彼に抵抗を見せる町々をつぎつぎと焼き払うのである。

一方、Harold 王は YORK での勝利に酔う暇もなく、Guillaume の上陸のニュースに、急いで LONDON へ引き返さなければならなかった。YORK で助けてやった、ノーサンブリアの Morcar 伯とマーシアの Edwin 伯が援軍として Guillaume との戦闘に参加してくれるはずである。YORK でのすさまじい戦闘の後、10月6日には LONDON に戻って来た。YORK から LONDON まで4日間しかかかっていない (Trevelyan, p.113)。戦闘と長旅で疲れているはずの体を奮い立たせて、Harold 王は再び軍隊を率いて

HASTINGS の戦場へと赴かなければならなかった。

ここで、1066年の1月から ‘the Battle of HASTINGS’ 「ヘイスティングズの戦い」までの出来事をまとめてみようと思う。

- 1月5日：Edward 王の死去
- 1月6日：Edward 王の葬儀
Harold の即位， Harold II の誕生
- 4月23日：大彗星の出現
- 9月12日：Guillaume 船団， イングランドに向けて出港
嵐のため引き返す
- 9月20日：ノルウェー王率いる船団， YORK を攻略
- 9月25日：「スタンフォード橋の戦い」でノルウェー軍全滅
Harold 王軍の大勝利
- 9月27日：Guillaume 船団， 再出港
- 9月28日：Guillaume 船団， PEVENSEY に上陸：戦闘準備
- 10月6日：Harold 王軍， LONDON に帰還
- 10月11日：Harold 王軍， HASTINGS に到着， 戦闘準備

再び「タペストリー」に話しを戻そう。

(3)一日だけの激戦

10月14日。ついにその日がやって来た。ノルマンの騎馬兵隊は槍と盾を手に、集合し、現在は BATTLE と呼ばれている町にあるなだらかな坂の戦場へと出陣していく。Harold 王の軍隊（ここでは「サクソン軍」と表現する）はすでに丘の上に陣取っていた。そしてついに戦闘開始。

ここからの「タペストリー」の描写はすばらしい。ノルマン騎馬軍団とサ

クソン歩兵軍団の激突を事細かに描いている。槍を振りかざし突撃する騎馬軍団。それを盾で防ぐ歩兵軍団。「タペストリー」の下段には、足や首を切り落とされた兵士の姿。戦死した兵士が生々しくつぎつぎと描かれている。

それでも両軍の虚虚実実の駆け引きで、鬼気迫る戦いになっていく。両軍、実力伯仲、鎬を削る戦いが展開されている。YORK から Morcar 伯と Edwin 伯の援軍が未だに到着せず。Trevelyan (p.115) は、「エドウィン (Edwin) とモルカル (Morcar) とは、裏切りか怠慢かまたは不可避の延引きによるかを誰も知らないが、非常に遅く南部に到着したため、ヘイスティングズにおいてハロルド (Harold 王) を援けることができなかった」と述べている。それでも丘の上にとっかかり陣取り、孤軍奮闘するサクソン軍団。

一方、聖職者は武器を携帯できないため、鉄鎚を振り回しながらノルマン軍を激励する Odon 司教。一時、Guillaume の戦死が戦場に流れたが、Guillaume 自身が兜を脱いで、健在振りを示す場面も描かれている。

激闘の末、長い一日の消耗戦に耐え抜いたノルマン軍に戦況は次第に有利になる。ノルマン軍の攻撃はサクソン軍の側近たちに迫り、ついに Harold 王の護衛戦団 Gyrth 伯や Leofwine 伯が次々に戦死した場面も描かれている。サクソン軍の竜の軍旗を持つ騎士も倒れた。そしてとうとう Harold 王自身も目を矢に射抜かれて戦死してしまう。Harold 軍は玉砕した。残ったサクソン軍の兵士たちは皆斬殺されていった。とうとうサクソン軍は玉砕する。あの「大彗星」の出現の意味は、このような形で示され、夕暮れまで続いた戦いは、Guillaume の勝利で終わった。

(4) Harold 王の遺体

King Harold lay dead on the battlefield in his native Sussex where he had fallen, with his loyal brothers Earls Gyrth and Leofwine and his *huscarls*¹⁰⁾ at his side.

—Walker, p.206

ところで、Walker は上記のように述べているが、Harold 王の遺体は、弟たちと戦場に置き去りにされたままなのであろうか。そのことについては、いろいろな説があるがどれも確証はない。

Guillaume が HASTINGS の砂浜のどこかに埋めてしまったとか、戦場に置き去りにされたままとか、Harold の母や妻がいる WINCHESTER に送り返されたとか、BOSHAM の Holy Trinity 教会に埋葬されている (*Secrets of the Bayeux Tapestry*, p.29) とか。しかし、一番確証が高いのは、Harold 自身が建築させた Waltham Abbey に埋葬されているという説だろう。

この Waltham Abbey は LONDON の北、EPPING の近くにある。Motorway 25 (通称M25) を北上して、Junction 26 で M25 を降りて少し走ったところにある。予想以上に小さな町に、この石造りの寺院はどっしりと建っていた。

生前、Edward 王はノルマン風の寺院の建設を目指していた。それが Westminster Abbey で、イングランド最初の本格的な石造り寺院になるはずだった。そのことを知った Harold は自身もすぐに石造り寺院の建設に着手した。それがこの Waltham Abbey である。しかも、財力に物を言わせて、Edward 王の Westminster Abbey よりも早く1060年に完成し、イングランドにおける最初の本格的な石造り寺院は Waltham Abbey ということになってしまった。Harold は Edward 王を出し抜くことにより、自分の力を人々に知らしめたのである。

結局、Westminster Abbey が完成したのは、前にも述べたが1066年の12月28日のことである。Edward 王が亡くなるほんの8日前のことだった。

この寺院のことや Harold 王のことをあまりに熱心に聴いたものだから一枚のチラシを渡された。この寺院では、'King Harold Day' というのを毎年、Harold の命日 (10月14日) に近い土曜日に行っているそうだ。今年は10月11日の土曜日に開催されるから見に来ないかと誘われた。彼らの説明の中で 'King Harold' よりも 'the last Saxon King' という言葉が何度も使われたのは、その村の人々が、同じサクソン人として、今でもどれほど Harold を

慕っているかが分かり、納得した。

この一帯は、昔から Essex と呼ばれて、サクソン人によって建設された「エセックス王国」（「アングロ・サクソン7王国」の一つ）であった。

しかし、Harold 王は、父 Godwin と違って純血のサクソン人ではなかったことをこの村人たちは知っているのだろうか。Godwin 家の系図でも見てきたように、彼にはサクソン人とデーン人の血が混ざっている。彼を正確に呼ぶなら、‘the last Saxon-Danish King’である。

Harold 王の墓は以外にも寺院の外にあった。元々は寺院内にあったのだが、その墓のある部分が壊されて、野晒しになったままだそうだ。

Guillaume の凱旋

(1) LONDON へ

Harold 王を倒した Guillaume がつぎに予定していたことは、できるだけ早く LONDON に入り、そこでイングランド王としての戴冠式を行うことであった。しかしイングランドの他の貴族や人々が彼をイングランドの王と認めるには時間が必要なこともわかっていた。とにかく HASTINGS を出て、RYE を通り、DOVER へ向かった。

途中、ROMNEY（現在の OLD ROMNEY）を通ったとき、町全体を焼き払った。ノルマンディーから一緒に出港した船の二艘が PEVENSEY ではなく、この ROMNEY に漂着した。この町の人たちはその二艘を焼き払ってしまったのだ。その恨みを晴らすため、また Guillaume にまだ抵抗を示すイングランドの人々への見せしめもあったのではないかと思われる。

(2) DOVER BEACH

そして ROMNEY を後にして DOVER へ。DOVER には海岸線の長い砂浜こそないが、すばらしい湾があり、そのすぐ傍に、聳え立つ白亜の絶壁がある。HASTINGS よりもはるかに高い丘があり、防備の点では完璧な立地

条件を備えている。Guillaume はここに砦としての堅固な城を築くことにした。万が一の時には、ここを基点にできるような城の建築を目指した。

ところで、霽のかからない晴れた日には、DOVER からフランスの CALAIS（カレー）が見える。わずか30キロメートルの距離である。DOVER 城から、港を見下ろしたり、遠くに見えるフランスの対岸を眺めていると、遙か昔、暗唱した Matthew Arnold の詩、‘Dover Beach’ の冒頭の部分が思い出された。この詩には DOVER からフランスの明かりが点滅するのが見えるという件くだりがある。イギリスにまだ一度も行ったことがなかった当時は、DOVER から対岸のフランスを眺めてみたいという憧れを強く抱いたものだった。

The sea is calm to-night,
The tide is full, the moon lies fair
Upon the Straits; — on the French coast the light
Gleams and is gone, the cliffs of England stand,
Glimmering and vast, out in the tranquil bay.

— ‘Dover Beach’, ll. 1-5

(‘Dover Beach’ and Other Poems, p.86)

Guillaume は城大工や石工をノルマンディーから呼び寄せ、建築を急がせた。城の完成の目途がついたとき、LONDON に向かって出発した。途中、CANTERBURY に立ち寄り、一気に LONDON のサザック地区 (SOUTHWARK) へ乗り込んでいった。

(3) イングランド人の抵抗

しかし、テムズ川の対岸では、Guillaume を認めない人々が待ち受けていた。彼らは、Harold 王が戦死した今、故 Edmund 王の孫 Edgar をイングランド王として即位させることを望んでいたのである（『アングロ・サクソ

ン年代記』1066年の章)。あくまでサクソン人の血を引く王の誕生を熱望していた。

Guillaume にとって今、橋を渡るのは危険であった。LONDON に入るにはいかにしてテムズ川を渡るかである。彼はサザックー帯を焼き討ちにし、橋を渡らずに、一旦そこを後にした (Ashley, pp.43-44)。

William I の誕生

Guillaume は、デンマーク王 Sweyne がテムズ川を渡ったWALLINGFORD を目指す。ここは OXFORD に近い場所で、テムズ川のかかなり上流に位置しており、川幅もずいぶん狭くなっている。

無事、テムズ川を渡った Guillaume の一行は、そのあと LONDON の北東部にある BERKHAMSTED¹¹⁾ に滞在していた。イングランド人の降服を促すために、彼が進軍した途中の村々を略奪し、ことごとく破壊していった。その政策は成功した。(Trevelyan, p.115)

Guillaume の滞在地に、Edgar 自身と彼を支持する Ealdred 司教と LONDON の主だった人々が、Guillaume に会見に来た。しかし、Guillaume に大きな危害を加えられ、止むを得ず、屈服してしまった。彼らは、Guillaume に対して忠誠を誓い、Guillaume も彼らに対して、慈悲深い王になることを約束した (『アングロ・サクソン年代記』の1066年の章)。

このように事態が終結して、Guillaume 一行は亡き Edward 王に認められた正式の後継者として、無事 LONDON に入ることができた。そして Guillaume は、その Edward 王が建立した Westminster Abbey で Ealdred 司教の立会いのもとイングランド王として戴冠した。これが Westminster Abbey での最初の戴冠式である¹²⁾。ここに William I が誕生した。その日は、その Edward 王の最初の命日 (1月5日) が間じかに迫った、12月25日のことであった。The Battle of HASTINGS (10月14日) で Harold 王を破ってから2ヶ月以上がすぎていた。

Guillaume は7代目のノルマンディー公爵であると共に William I としてイングランドも君臨する王となったのである。Guillaume がイングランドにもたらしたのは、ノルマン訛りを持つフランス語だけではなかった。

William the Conqueror として

(1) サクソン貴族の処遇

一つ目は、イングランド各地の反抗するアングロ・サクソン貴族たちを徹底的に叩き潰し、ノルマン貴族に取り替えた。たとえば、弟 Odon をケント伯爵に任命したり、ノルマンディーでは、Duke's steward であった William fitz Osbern を Hereford 伯爵に据えたりした。

もう少し詳しく見るには、富沢霊岸氏の『イングランド中世史概説』(p.94)が参考になる。それによれば、次のような記述がある。「イングランドの五分の一にも達する広大な王領地を確保し、サクソン貴族領主を殆ど追放してノルマン貴族にとって代らせ、しかも貴族領の半分は、バイユー司教オド(Odon)、モーターン侯ロバール(Robert)、…中略…ら10人の王の親族、あるいは王の信任の厚い者を、とくに反乱の危険性の強い辺境に配したのであった。」という状況を作り上げた。

(2) ノルマン風築城

二つ目は、イングランド各地にノルマン風の城を築かせた。確かに、あちこちで反乱が相次いでいたし、それを鎮圧していくためにも築城は必須であった。LONDON や DOVER はもちろんだが、北部の HEREFORD、東部の COLCHESTER、さらには、ウエスト・サクソン王国の首都である WINCHESTER にも城を築いた (Ashley, p.86)。

(3) イングランドの土地台帳

三つ目は、William I は、征服したイングランドの土地を隈なく検分し、人、

家畜、土地などが細かく調査された。というのも、この根底には、イングランドのすべての土地は、王 William とその貴族たちのものであるという考え方がある。1085年に最初の調査が完了し、イングランドの土地台帳が完成した。この台帳は後に *Domesday Book* (『ドゥームズデイ・ブック』) という資料としてまとめられた。この台帳により徴税の効率化が図られ、王室の財政は潤い、被支配者は重税に苦しみ、反抗を不可能にしていった。

ここにノルマン王朝の支配がイングランドの隅々まで行き渡り、Guillaume の野望が実現したのである。Guillaume こと William I は、1087年の9月9日に ROUEN で亡くなったが、それ以降も、ノルマン人 (Guillaume の子孫たち) のイングランド支配が続いていくのである。

注

- 1) 例年、夜は金色に照明されている「エッフェル塔」であるが、今年の夏は、青色に輝いていた。
- 2) 一般的に tapestry (綴れ織り) という言葉が使用されているが、実際は図柄が織り込まれたものではなく、うすい布 (linen) に糸糸で刺繍されたものである。したがって tapestry というよりも embroidery という方が正確ではあるがここでは「タペストリー」をいう表記を使用する。
- 3) これもスカンディナヴィア半島やユトランド半島からの侵略者への一般的な総称。侵略し定住した地域で呼び名は異なる。たとえば、イングランドではデーン人、フランスではノルマン人。
- 4) それでも Charles III はこれらのスカンディナヴィア人 (ここではノルマン人) 入植者を、さらなるヴァイキングの侵略者に対する盾として利用しようと考えていた (Nicolle, p.24)。
- 5) Guillaume は Robert の嫡男ではなく、庶子だったので、後に William the Conqueror という「征服王」の他に William the Bastard というありがたくな

い名前もいただいている。しかし、*William the Conqueror* (p.4) によれば、彼らはキリスト教に改宗したものの、ノルマン人の伝統的な結婚習慣も維持していた。したがって彼らノルマン人たちの間では、庶子も嫡子とまったく平等な権利をもつものとして扱われた。

- 6) *Secrets of the Bayeux Tapestry* (p.9) によれば、‘Aelfgifu (or Aelfgyvas)’ という名前は、11世紀には高貴な地位にある女性の名前として人気があった。
- 7) Edward の母 Emma がデン王朝の最初の王, Canute と再婚し, Harthacanute を出産したためである。
- 8) Canute の信頼を得たのは, Godwin がデンマークとスウェーデンの両方の王室の血を引く Gytha と結婚したためであろうと考えられる。したがって Harold も王室の血は引いているが, イングランドの王室の血ではなかった。
- 9) ジュート族の Hengist と Horsa の兄弟は, 449年にケント地方の東端にあるサネット島に上陸したといわれている。ケントからブリトン族を追い出し, ケントを支配した。彼らと同族のアングロ族やサクソン族が続いてブリテン島に侵略してきた。
- 10) この huscarls (「家中戦士」) とは, アングロ・デイン的な制度で, 王から給与を受け, 王自身も一員となっている軍事的ギルドに編成された, 重装備の職業的な騎乗した歩兵の護衛対のこと (Travelyan, p.97 & p.113)。
- 11) BERKSHAMSTED は, 現在では, LONDON から北に向かう高速道路 Motorway 1 (通称M1) と Motorway 25 (M25) が交わる場所から, 北西に約15キロメートルほど離れたところにある。
- 12) Harold II の戴冠式がどこで行われたのか今でも定かでない。もし Westminster Abbey で行われたのであれば, Guillaume の William I としての戴冠式は二度目となるが, 葬儀 (King Edward) と戴冠式を同じ日に同じ場所で行ったとは考えにくい。

参考文献

書籍

- Almgren, B. (蔵持不三也 訳) 1990. 『図説・ヴァイキングの歴史』原書房, 東京
The Anglo-Saxon Chronicle (Modern English Version) : The Online Medieval &
Classical Library, Online Medieval and Classical Library Release # 17
- Arnold, M., *Dover Beach and Other Poems*.
- Ashley, M. 1973. *The life and Times of William I*. Book Club Associates, London
- Bertrand, S., *Tapisserie de Bayeux*. Heimdal, Bayeux
- Bragg, M., (三川基好 訳) 2004. *The Adventure of English*.アーティストハウス,
東京
- Brewer, C., 2007. *The Death of Kings*. Abson Books, London
- Brooke, C., 1961. *From Alfred to Henry III*. Thomas Nelson and Son Ltd.,
Edinburgh
- Coad, J., *Battle Abbey and Battlefield*. English Heritage
- Coad, J., *Dover Castle*. English Heritage
- Davis, C.S. & Levitt, J., (三輪伸春 監訳) 2005. *What's In a Name?* 英光社, 東京
- Halliday, F.F., 1980. *A Concise History of England*. Seibido, Tokyo
- Hicks, C., 2007. *The Bayeux Tapestry*. Vintage Books, London
- 丸茂和博, 1997. 『ロンドンから行く田舎町』双葉社, 東京
- Mcaleavy, T., *Life in a Medieval Abby*. English Heritage
- 三輪伸春, 2005. 『英語史でわかるイギリスの地名』英光社, 東京
- Morgan, K.O., 1984. *The Oxford Illustrated History of Britain*. Oxford University
Press, Oxford
- 森 護 1986. 『英国王室史』大修館書店, 東京
2000. 『英国王妃物語』河出書房新社, 東京
- McCrum, R., Cran, W. & MacNeil, R., 1986. *The Story of English*. BBC
Publications, London.

- Nicolle, D., (桑原透 訳) 2001. 『シャルルマーニュの時代—フランク王国の野望—』
新紀元社, 東京
- 大沢一雄 1991. 『アングロ・サクソン年代記研究』 ニューカレントインターナシ
ョナ 東京
- 定松 正 他 編集 1992. 『イギリス文学地名事典』 研究社出版, 東京
- Sellar, W.C., & Yeatman, R.J., 1999. *1066 And All That*. Methuen, London
- 富沢 霊岸 1970. 『イギリス中世史概説』 ミネルヴァ書房, 京都
- Trevelyan, G.M., (大野真弓 監訳) 1976, *History of England*. みすず書房, 東京
- Trowles, T., 2008. *Treasures of Westminster Abbey*. Scala Publishers Ltd., London
- Walker, I.W., 2006. *Harold*. Sutton Publishing, Stroud
- Wilson, D., 2004. *The Bayeux Tapestry*. Thames & Hudson, London

小冊子

Genealogy of French and English Monarchies

A Guide to Waltham Abbey Church

Pevensey and Westham

Pevensey Castle

Secrets of the Bayeux Tapestry

Sussex

The Cathedral of Rouen

William the Conqueror

DVD

Alfred The Great

The Battle of Hastings 1066 Tapestry of a Battle

Life in Anglo-Saxon Britain

Norman Conquests

The Tapestry of Bayeux

William the Conqueror

In The Steps of Duke Guillaume of Normandy's 1066 Conquest of England

Yasuhiro NOHARA

In UK, the death of Elizabeth II automatically should place her son Charles, Prince of Wales, on the throne. There should be no difficulty at all as to who inherits the crown; no civil strife between her children, Charles, Anne, Andrew and Edward. In the past, however, this peaceful state of crowning was not common, on the contrary, coronations often led to bloodshed; the first in succession to the throne did not always manage to mount the throne.

When King Edward the Confessor died childless in 1066, a question, who should succeed the throne, occurred naturally. Edgar, who was the grandson of King Edmund, was one, Norwegian-Danish King Harald was also one, and Guillaume, the Duke of Normandy was another.

Nevertheless Harold, the son of Earl Godwin, took a drastic measure: he had two services on the same day; King Edward's burial and his own coronation, which was extremely unusual even at that time, and which eventually aggravated the matter.

The above three people appealed Harold's coronation. Edgar, however, was regarded too small to succeed the throne. King Harald from Norway invaded the north of England and occupied York temporarily but was finally defeated by newly crowned King Harold at the Battle of Stamford Bridge. Guillaume with a stronger claim against Harold was different from the two. He was waiting for the good time for a battle with Harold.

Guillaume was born in 1027 at Falaise in Normandy, France, as an illegitimate child of the sixth Duke Robert of Normandy. King Edward's mother, Emma, was from Normandy, and Guillaume and King Edward

were relatives.

Guillaume made an invasion at Pevensey with a great fleet of warships in 1066. As is well-known, he completely beat King Harold's army at the Battle of Hastings. Nevertheless, it was more than two months before he crowned himself as William the Conqueror, King of England.

This summer, I visited cities and towns in Normandy which were related to Guillaume, and also drove along the south-eastern coast of England. This means that I tried to follow the steps of Guillaume's conquest of England.